

本と子どもをつなぐ、あたたかな声

今回は、「名作童話を読む母の会」の発足当初から活動を支えてきた大下たみ子さんと櫻井多恵子さんに、メンバーを代表してお話を伺いました。

我が子から、地域の子どもたちへ

「最初は、我が子にどんな本を読んでもあげたらいいかを知りたいという思いからでした。」そう懐かしそうに語るのは、大下たみ子さんです。

ある日、幼い我が子連れで図書館で本を探していると、図書館の館長から絵本の勉強会に参加しないかと声をかけられました。講座には10人ほどの母親が参加し、1年間学



んだ後、「自分たちで勉強会を続けてみましょう」という話になり、大下さんは最初の会長を引き受けました。

しばらくは自分の子どもに読み聞かせをしながら、「この本いいよ」「これ、ちょっと読み聞かせには向かないね」というような情報を共有していました。

次第に子どもたちは大きくなり、「これって地域の子ども



たちにも広げたいねという話になって。じゃあやろうかって。」こうして読み聞かせの対象は我が子から地域の子どもたちへと変わっていききました。

それでも続けてきた理由

活動は、決して順風満帆ではありませんでした。「活動当初は、考え方の違いから、離れていく方もいました。人

読み聞かせとの出会い
小学校のPTAで一緒だった保護者から「名作童話を読む母の会」に誘われ入会した櫻井多恵子さん。自分の子どもに読み聞かせをする中で、絵本にどっぷりハマっていました。

初めて読んだ日

「覚えています。子どもがいつぱいいて。そんなに大きい部屋じゃなかったんですけど、声通るかなって。」今振り返ると、選んだ絵本にも反省がありました。「今にして思えば絵本の絵が小さかったの。今はいろいろ読み込んできたから、読み聞かせに合う本を探せるようになったけど、最初は選書がよくなかった。それでも子どもたちは楽しんで聞いてくれたから、まあまあ良しとしようかって。」



「ああ、面白かった」

絵本の選び方や持ち方、読み聞かせの基本を会のメンバーと試行錯誤し、時には個人的に読み聞かせの講習会にも参加した櫻井さん。そうして、読み聞かせの技術を磨いていくと、嬉しい瞬間にも立ち会います。



「ああ、面白かった」って言うって帰っていく子がいるんですね。もう至極です。『おぼちゃん、またね。すっごく楽しかったわ』って手振ってくれると「最高！」って思います。」

一期一会の時間

櫻井さんは、人が読む声の温かさ大切にしています。

「人間の生の声は途中読み間違えたりもして、『あ、ごめんね』って。なんか人間的で優しいじゃないですか。人の声だと心も落ち着きますしね。」人が読むからこそ、時には読み間違えることもあります。けれど、人が読むからこそ、同じ本でも、その日その瞬間



前で読むことに抵抗を感じる方もいますし、全員が同じ思いで始めたわけではありません。それでも、大下さんは、これまで「会を辞めたい」と思ったことはないといいます。

「保護者の方から『子どもがおはなし好きになって、たくさん本を借りるようにになりました』と言ってもらえる時がうれしいなと思います。」

おはなし会が終わると、大下さんは子どもたちに「たくさん本を借りて帰ってね」と声をかけます。「図書館って、子どもが1人で堂々と行ける、自分の意思で本を選ぶことができる、そういうところだと思っています。」

一冊の絵本を聞いた子どもが次に自分で本を選びに行く。おはなしホイホイは、子どもたちが本と出会う入口にもなっていました。



にしか生まれない時間があります。

「今日どこ行こうかってなったときに、『図書館行こうか』って、そんなノリで図書館に来てくれたらうれしい。」

読み聞かせだからこそ味わえる、何が起こるかかわらないワクワク感。櫻井さんは、その一期一会の時間を図書館で楽しんでほしいと語ります。

未来へつなぐ想い

かけがえのない瞬間を1600回も重ねてきた童話の会について櫻井さんは、「とにかく長く続けてほしいですね。そして、私たちの活動を引き継ぎ、新しい形で広げていってもらえたらうれしいです。」会のメンバーとは「何回、目指そうか」と毎年話題になるそう。「やっぱ2000回できたらね。」と櫻井さんは、やわらかな笑みを見せていました。



これから子どもたちへ

36年間、絵本の魅力を伝えてきた大下さん。「これから、できるだけ多くの本を子どもたちに届けていきたいと思っています。同時に、次の世代に活動を引き継いでいくことも大切だと考えています。」

童話の会には最近新しいメンバーが加わり、現在は15人で活動しています。「新しいメンバーの方たちも上手に本を選ぶし、頼もしいです。」新メンバーに刺激をもらいながら、今日も大下さんは、「たくさん本を借りて帰ってね」と優しく子どもたちに声をかけます。

